

〈論文〉

並置と迂言(1) — Poor as he is, he is happy. —

景山弘幸

0. はじめに

本稿は(1)のような文について考察し、当該文の性質を「並置」と「迂言」という観点から捉えようとするものである。

(1) Poor as he is, he is happy.

まず、これまで指摘されてきた3点を挙げる。①この文は「情意の濃い表現」(以下、「情意表現」)である。¹②接続詞なしに2つの文を結んだ「並置」構文である。²③as he isの部分はある種の「迂言」表現である。

以下、本稿では、1節で先行研究を概観し、上記3点を確認しながら当該構文の特徴を整理する。2節では、文接続の一形態としての「並置」構文について「文法化」の観点から考察する。3節では「迂言」について「主体化」の観点から考察する。4節では、表題の文の「情意表現」という部分を日本語の「係り結び」の中の「こそ」表現との並行性から述べる。5節では、英語の関連構文について指摘する。6節は、まとめである。

1. 先行研究

1.1 市川(1954)

市川(1954)はXXIII節でYoung as I amについて詳細に論じている。ポイントを整理しておこう。

(2) Young as he was, he was not unequal to the task.

(若いけれど彼はその仕事に堪える力がないではなかった)

(3) Young as he was, it is but natural that he should have committed such a

mistake.

(若いんだものこれくらいの間違をしでかしたのは当たり前のことさ)

(2) と (3) から分かるようにこの構文の前半部分の解釈は必ずしも「～けれど」という「譲歩 (concessive)」とは限らない。「Young as I am は「私のように若くって」であって、それが yet の意味の concessive clause になったり、since の意味で理由を表わすようになるのは全く context による」(195)。これを認知言語学的に言えば、次のようになる。

観察Ⅰ：この構文の前半部と後半部の意味関係は言語主体の解釈 (construal) に委ねられている。

Young as I am の起源は 18 世紀ごろの As young as I am という形式であり、As I am young からの倒置ではない³。(4) がその例として挙げられている。

(4) As universal a practice as lying is, and as easy a one as it seems, I do not remember to have heard three good lies in my conversation.

(5) は as...as の初めの as が落ちた例とみなすことができる。

(5) Madman as you are, you think nothing of ruining a whole family.

倒置構文でないということは接続詞なしの構文であることを意味する。接続詞なしに文をつなげることを「並置 (parataxis)」という。

観察Ⅱ：この構文は接続詞なしの「並置」構文である。

Young as I am の as I am の部分については、「ほんの挿入的の句で力を添えるために入れたままである。」(187-188) とし、(5) の文についても「as you are はやはり挿入句で madman であることを強めるために添えたものである。」(188) としている。

観察Ⅲ (予備)：as 以下の部分は「強調」の意を添える挿入句で、Young as I am は Young 一語で済ませず as I am を回し入れた「迂言 (periphrasis)」

表現である⁴。

1.2 大塚 (1938)

大塚(1938)はこの構文について1節を割いている。上で整理した観察Ⅰについては、(6)の例文を挙げ、以下のように述べている。

- (6) a. Young as he was, he was not unequal to the task.
- b. Whichever you may take, I will not object to it.
- c. Turning to the right, you will soon come to the stone bridge.
- d. Seeing that, he ran away.

「上記の構文は要するに或る概念をぼつりと投げだしただけで、それが他の概念と如何なる関係にあるかは其の場合場合によって聴者が自ら考え察して行くような構文である。」(205) 観察Ⅱに関しても、これらは「表面上何等の connective のない構造、言い換えれば、論理上の連結的概念が何等の外部的形態の上に表はされて居ない構文」としている。観察Ⅲ (予備) については、直接 (6a) の *as he was* について言及していないが、この接続詞なしの構文、つまり並置構文が「主観の情的要素が多分に含まれて居る」(206)、「*Young as he was* は *Though he was young* よりも遙かに情的色彩が濃厚である。」(207) と述べている点は注目に値する。これを踏まえ、観察Ⅲ (予備) を改変して観察Ⅲとする。

観察Ⅲ：この構文は主観的で「情意」の色彩が強く、*as* 以下の部分は「強調」の意を添える挿入句でそれを含む前半部分は「迂言 (periphrasis)」表現である。

1.3 関口 (1954)

関口 (1954) は、この構文に対応する (7) のドイツ語表現について解説している。

- (7) *Bedeutendes gibt sich einfach, einfach wie es ist.*

(有意義な事柄に限って単純な形を取ってあらわれる。けだしそれ自体が単純なものだからである。) (下線は筆者、「なにしろ頗る」ともある)

後半部の *einfach wie es ist* が英語の *simple as it is* に対応する。観察Ⅰに関し、「『それは簡単なるがゆえに』(即ち *as it is simple*) の意になり、時とすると、『それは簡単なりとい

えども』(即ち simple though it is と同意)になりますが、ドイツ語もほぼ同じです。」(110)と述べている。観察Ⅱについては、einfach, einfach wie es ist. が einfach という語がコンマで繰り返されている点をとらえ「こういう風に、同一単語をコンマ一つ距てて鉢合せさせる修辞法は、古典語以来有名な修辞法」(110-111)とし、観察Ⅲに関わってはコンマ後の wie es ist (E. as it is) については「いわば余計な飾りものなのでなんなら無くてもよい」(111)とし、(8)の文を挙げている。

(8) Einfach, gibt Bedeutendes sich auch einfach.

(簡単なるが故に、真価あるものはまた簡単な姿をとる。)

また、「讓歩」の解釈の例として (9a) を挙げながらもドイツ語で「讓歩」の場合は「so einfach es ist という形式が多く用いられます。」(114)と指摘している。その例は (9b,c) である。

(9) a. Bedeutendes, einfach wie es ist, bleibt manchen unzugänglich.

(本当に値打ちのある事柄というものは、ごく何でもないうでいて、しかも多くの人には歯がたたぬとしたものだ。)

b. So jung es war (年こそ若けれ)

c. So arm ich bin (貧乏はしているが)

さらに So wie es ist (『そうしたもの』) という形式に関し、「…wie…の形式には、wie の前に何か形容詞または副詞のようなものが要りますが、時には何等そういうものを用いなくて、単に so だけで間に合わせる場合があります。」(114)と述べている。

(10) So wie die meisten Menchen sind, das Einfachste kommt ihnen unbegreiflich vor.

(大抵の人間はそうしたものだが、最も簡単なことが彼等には不可解に思われる。)

(10) に関し、「『そうしたもの』とはどうしたものだが、それは別に云わない。」(115)としている。日本語の「それこそ」にあたる「強調」表現と考えてさしつかえないと思われる。これを観察Ⅲとの関係で考えてみるとこの種の形式はドイツ語であれ英語であれ「強

調」のために「迂言」的に挿入された句と言える。

1.4 この構文の特徴

先行研究で明らかになったこの構文の特徴を改めてまとめておこう。

特徴Ⅰ：この構文の前半部と後半部の意味関係は言語主体の解釈 (construal) に委ねられている。

特徴Ⅱ：この構文は接続詞なしの「並置 (parataxis)」構文である。

特徴Ⅲ：この構文は主観的で「情意表現」の色彩が強く、as 以下の部分は「強調」の意を添える挿入句で、それを含む部分は「迂言 (periphrasis)」表現である。

2. 並置と文法化

当該構文は「並置 (parataxis)」構文である。並置についてまとめておこう。

2.1 中島 (1951)

中島 (1951) は、「連結詞」の発達に関して次のように記述している。

(11) a. ModE では接続詞も関係代名詞もよく発達していて複雑な内容を充分表現することができるが、OE においてはまだこれらの連結詞 (Connective) が充分発達していない。接続詞の数は少なく、前で見たとように本来の散文は and で不器用に文を重ねる有様であった。(212)

b. ModE as は接続詞として重要なはたらきをしているが、その語源は OE (Anglican) *alswa* で、原義は *all-so (=wholly so)* ということ *swa (=so)* をつよめた形である。(中略) 本来の *so* (OE *swa*) は *in like manner* を意味する副詞であった。(中略) …二文の並置から従属構文への推移が見られる。(213-214) (下線は筆者)

接続詞をもつ従属構文は通時的には後から出てきたものである。また接続詞の多くは、前置詞や副詞が後ろに節を従えるようになって成立した。このような現象は「文法化 (grammaticalization)」と称される⁵。当該構文は、接続詞がない並置構文という意味で文法化以前の原初的な姿を呈している。

2.2 葛西 (1998)

葛西 (1998) は、「心的態度の「ゆれ」」について述べる中で、次のように述べている。

- (12) 強い感情に支配されたときには、思考が弱まり（客観的な態度が失われ）自己中心性の強い「私的言語」の性格をおびる。(181)

「私的言語」とはピアジェが子供の言語の特徴とするもので、「自己中心」的、「今」的、「ここ」的な言語現象をいう。葛西は、心的態度の一つとされる時制のゆれについて述べているのだが、同時に構文法についても小林 (1976) を引用しつつ同様の指摘をしている。

- (13) 反復法は同位法にもとづく単純構文であり、従統法にもとづく複雑構文に対立する。文章の進化は前者から後者への道をとっている。ひとは文明化された段階でも、感情の激するときは未開人の段階にもどるのである。ゆえに反復法を愛好するということは、主知的な人間よりも主情的な人間に多いことを推論することができる。(小林 1976:64) (186) (下線は筆者)

並置構文は、「情意表現」と相性がよいのである。

2.3 本多 (2005)

本多 (2005) は「個体の言語発達と文法化の並行性」について Givón (1979) を引きながら次のようにまとめている。

- (14) Givón (1979) は言語の個体発達の道筋として「初期の状況依存的な語用論のモード (early pragmatic mode) からのちの、統語構造をもつ自立的なモード (later syntactic mode) への移行」を提示し、それが系統発達ないしはいわゆる通時態としての言語変化のあり方としての、「ゆるやかな並置 (loose parataxis) からきっちりとした構造を持つ統語的な結合 (tight syntax) への移行」と並行していると述べている。これは、個体の言語発達のあり方と文法化 (文法構造の成立) のあり方とが並行しているという考え方である。また文法化の考え方においては、言語の共時的な姿は通時的な変化の積み重なりとしてのあり方を残していると考えられる。(242-243) (下線は筆者)

「文法化」と「言語の個体発達」との並行性は、裏返せば、話者が何らかの理由で「状況依存的」な状態に突入すれば、接続詞をもつ「統語的な結合」が崩れ、「ゆるやかな並置」が起こり得ることを示唆している。「状況依存的」とは「自己中心」的、「今」的、「ここ」的ということであり、その理由が感情の強調をはじめとする「情意」の前景化（言語化）とすることは的外れではないと考える。

3. 迂言と主体化

「文法化」には「主体化 (subjectification)」が深く関与する⁶。中村 (2004:33-48) は、二つの認知モードを措定する。

(15) a. I モード：Interactional mode of cognition：状況密着的な認知モード

「主体化」を伴う

b. D モード：Displaced mode of cognition：状況外からの（仮想）認知モード

「脱主体化 (desubjectification)」を伴う

さらに中村 (op.cit.) から引用しよう。

(16) 状況密着型の認知モードでは、文字通り視点は「オン・ステージ」にあって、「状況中心」の見方がされ、話し手が事態の参与体であること (S - パースペクティブ)」であることが多い。また視点が状況内にあるから、「直接的な経験 (immediate, experiential)」で、その表現は体験調で報告調にはならない (「非報告的」)。そして対象は「印象的」で「全体的」な捉え方になるだろう。これに対して状況の外から眺める認知モードでは、視点は文字通り「外置されていて (displaced)」, 「外部的」で「オフ・ステージ」であり、事態内の各参与体が注目されることになる (「人物中心」「O - パースペクティブ」)。そして対象は「分析的」な捉え方がされ、叙述の仕方は「報告的」で「物語的」となる。(34)

本稿で考察している構文が、I モードの認知であることが見て取れる。言語類型論的には、日本語がIモードを強く反映する言語で、英語はDモードを強く反映する言語とされるが、英語においても時にはIモード的に表現されることもあるのである。その「時」の一つに

「情意の濃い場面」があると考えるのである。

Iモードの認知には「主体化」が伴う。言語主体が、状況内に入り込むためである。英語は、「文法化」の結果、接続詞や前置詞を発達させ、また「脱主体化」により主語の明示を必要とするDモード的な言語に変わってきた。しかし、「情意の色濃い」主体が状況に入り込んでしまう（つまり「主体化」する）ような場面にあつては、原初的なモード（Iモード）で言語表現されるのである。

さて、当該構文には「迂言」表現（Poor as he is）が含まれていると考える。強い「情意」をもって「主体化」された場合、知的意味には貢献しない迂言要素が言語化される場合がある。

(17) Hit me a home run.

(17) の me は「迂言」要素と考えられる。「ホームランを打ってくれ」と願う話者の「主体化」された世界の中で「情意」のあまり言語化された要素と考えるのである⁷。「主体化」するのは言語主体（つまり話者）なので（17）のような文に生じる迂言要素（感興の与格（ethical dative））は1人称が基本である⁸。「主体化」に伴う「迂言」の例としては「付加疑問文（tag question）」や「感嘆文（exclamatory sentence）」があげられるが、これらについては稿を改める。

4. 係り結びと情意表現

表題の文の性質を十分味わうために、日本語の「それこそ」という表現を考えてみる。これまでの議論で、表題の文は「主観的」であり「強調」の意が含まれていることが明らかになった。「それこそ」には日本語の「係り結び」に登場する「こそ」が含まれているのでまずは係り結びにおける「こそ」の用法を見てみる。「こそ」は「此其」という「直示表現（deixis）」が語源ともいわれる。

半藤（2003）は、「こそ」の強調作用について次のように言う。

(18) 話者が頭や心で捉えた物事を主観的に表現する際の、その文の主観性を拡大する働き (51) (下線は筆者)

「こそ」の使用に背景には「主体化」が関わっていることが分かる。つまり話者が状況内

に深く入り込んでいる。また、主体化の要因としては「感動性」が考えられる。半藤は、「こそ」構文の感動性については、次のように述べている。例は現代語ではないので省く。

- (19) 本章で取り上げた「こそ」の各用法は、いずれも感動性が認められ、「感動表現」と認定し得る⁹。(71)

また、係り結びは消滅したともいわれるが、現代語の「それこそ」は係り結びが文法化によって副詞的用法を獲得した。

- (20) a. 地下足袋というものを、その時、それこそ生まれてはじめてはいてみたのであるが、びっくりするほど、はき心地がよく、(太宰治『斜陽』)
b. それに僕の家にも呉服屋が出入りしたとあっては、それこそ僕の方が家出をしたくなる。(小島信夫『馬』)
c. 私は焼けだされで、それこそ何一つなかった。
(北杜夫『マンボウおもちゃ箱』)

(20) の「それこそ」に関しての半藤の指摘は以下の通りである。

- (21) このような「それこそ」は副詞的用法以外には解釈できず、先に揚げた訳語「それはほんとに」「まったく」「まさに」等の感動的な意味が適合する。(126)

「それこそ」に感動的な意味合いが発生する要因は「こそ」が持つ感動性に因るとしている。その感動性は話者の主体化と不可分の関係である。

- (22= (1)) Poor as he is, he is happy.

標題の文は、「彼の現在がそうであるままの貧乏…」のような日本語をあてるべきものではなく、「それこそ貧乏だが…」のように迂言された「情意」を十分に感じ取りたい。

5. 関連する英語の文

同種の迂言表現を含む英語の関連する文をあげる。

(23) a. Kuniko's clothing was much more refined than mine, and she wore zori; but being the village girl I was, I chased her out into the woods barefoot until I caught up to her at a sort of playhouse made from the sawed-off branches of a dead tree. *Memoirs of a Geisha*:27

b. If you think that the solution to your conceptual problem *might* apply to a practical one, formulate your problem as the pure research problem it is, then add your application as a *forth* step:

(*The Craft of Research*:61)

c. Fool that I was, I suspected his motives in his offer. (江川 1991:81)

(23a) は、小説の一節である。「それこそ村娘だもの」と読みたい。小川高義氏の訳では見事に「情意」が表現されている。

(24) 邦子は私などよりずっと整った身なりをしていました。草履をはいています。こっちは田舎の貧乏娘ですから裸足で追いかけていきまして、ちょうど追いついたところが松林の中の遊び場でした。(下線は筆者)

(23b) は、論文作成の指南書である。the pure research problem it is の部分が迂言表現である。「それこそ純粋な研究課題」という意味であろう。(23c)については、江川(1991)が、「Fool that I was (=I was such a fool) は感嘆文に近い独立要素で、先行詞の名詞は無冠詞になる。(81)」と解説している¹⁰。「感嘆」については、市川 (op.cit.) も指摘している。

(25) Fool that I was! (ああわれながら愚かだった) などの exclamatory sentence も一種の ellipsis(省略法)であって appositive sentence だけ残ったものと見る。完全に言えば、Fool that I was, I believed everything he said. などのように後に何か来るところである。(188)

(23c) は並置構文でもあり迂言表現を含む表題の文との並行性はもはや明らかである¹¹。

(23a,b) の下線部内の I was/it is の部分は、英文法の参考書では、(26) の文に見られる「主

格補語を先行詞とする関係代名詞の省略」(e.g. 細江 (1971:374)) として扱われる。

- (26) a. That's the sort of man I am.
b. You are the man I say you are. (下線は筆者)

記述的にはその通りだが、本稿での考察を通して見つめ直せば次のようになる。

- (27) I was/it is/I am/you are の部分は話者の感情の「迂言」表現である。日本語にすれば「それこそ」の意である。

ちなみに迂言表現の先頭に出てくる名詞に付く the は (28) にもみられる「感嘆の the¹²」である。

- (28) a. She was *the* landlady (i.e. the typical landlady) .
b. It is *the* boot for present wear (i.e. the ideal boot)
c. He' s *the* Charles Morton (i.e. the famous…) Zandvoort (1975:118)

6. まとめ

表題の文繰り返す。

- (29= (1)) Poor as he is, he is happy.

1.4 節で見た三つの特徴について最後にまとめておく。前半部と後半部の解釈が言語主体に委ねられている (特徴Ⅰ) 理由は、この文が話者の主体化により主観的な「情意」を表現したものであるからである。「知」の伝達相手である聞き手のことは重要視されていない。「文法化」して「脱主体化」が標準である英語にあっても、話者の強い「情意」のもと臨時的に再度「主体化」され「文法化」とは一見逆行する原初的な「並置」構文 (特徴Ⅱ) をとっている。Poor as he is 中の as he is の部分は、日本語の「(それ) こそ」にあたる話者の情意 (「強調」) を「迂言」した表現 (特徴Ⅲ) であり、日本語の「(それ) こそ」と同様に「主観的」「感動的」な表現なのである。

注

- 1 人間の精神活動を「知・情・意」とすれば、言語表現も自ずと「知」の伝達に重きを置く客観的な文（過去形の報告文がその典型）もあれば、伝達というよりも「情意」の吐露のような主観的な文（感嘆文がその典型）もあり得る。
- 2 「文」とは、Gardiner のいう「文とは語または語群を用いて、はっきりした意図を示すもので、あとに休止が続くものである（『新英語学辞典』）」という意味で使う。必ずしも主語、述語等の形式を満たさなくてもよい。
- 3 次の前半文は倒置であり、標題の文とは区別されるべきものである。
Scoundrel though he be, he was innocent in this case. 市川（1954:195）
- 4 言語学における「迂言（periphrasis）」とは、「理論的には単一の語形で示しうる文法形態を、ある言語内の形式的制約によって二つもしくはそれ以上の語を用いて示すこと（『新英語学辞典』）」とされる。例えば、-er 比較級に対して、more + 形容詞・副詞は、迂言比較級と呼ばれる。構文法においても、一般動詞の疑問文の際に生ずる do や未来を表す際の will は迂言要素である。
ただし本稿で関心のある「迂言」は、修辞学でいう「まわりくどい言い方（『広辞苑』）」「時世や事情にうとい言葉。自分の言葉を謙遜するという語（『大辞林』）」「簡単に意味が伝達しうる場合に多くの語を用い、遠回しに表現すること（『新英語学辞典』）」の意味で使う。要点は、「話し手が聞き手を考慮せずまわりくどく遠回しに何かを言語化する」ことである。その「何か」を「情意」として見てみたい。『新英語学辞典』には、「迂言は叙事詩の高揚した文体にふさわしい表現として発達した」とある。
- 5 「文法化（grammaticalization）」とは、本来「内容語（content word）」であったものが意味変化を起こし「機能語（function word）」になる現象のことである。英語は、その歴史の中で「文法化」が進み「総合型言語」から「分析的言語」へと変貌した。
- 6 「主体化（subjectification）」には、二つの使い方がある。
①ラネカーの主体化（subjectification）という過程は、豊かな意味内容をもつ語彙が、徐々にその意味内容を希薄化させ表さなくなり、そこに反映していた認知プロセスのみと対応するようになる過程である。（中村（2004：21））
②トローゴットの主体化とは、言語表現に対する認知主体の読み込みや解釈による意味変化の過程である。（ibid.:23）
本稿で肝要なのは、後者、トローゴットのいう「主体の読み込み」という意味で当該構文が「主体化」されているという点である。
- 7 この種の二重目的語構文については、景山（1999）を参照。中村の指摘については中村（2004：45 - 46）を参照。
- 8 ドイツ語でも同様である。
The dative ethicus can be used mainly as first person singular mir, a little marginally as second person singular dir, more marginally as first and second person plural uns/euch. The third person is impossible. Ogawa（1997:7）
- 9 詳しくは、半藤（2003）第8章を参照。
- 10 There is a related type of descriptive exclamation in which a noun phrase with the or zero article is followed by that and a subject and verb（normally be）：
（The） fool that he is. （Quirk et.al. 1985:273n）
- 11 迂言要素として言語化される S + V の前の as, that, ϕ （zero）については稿を改める。
- 12 Although a/an is used for descriptive exclamations such as What a fool（he is）!, there is also an exclamatory use of the in The fool!, The silly boy!, etc.（Quirk et.al. 1985:273n）

参考文献

例文

- Arthur Golden. 1998. *Memoirs of a Geisha*. Vintage
小川高義訳. 1999. 『さゆり (上)』 文藝春秋.
Wayne C. Booth, Gregory G. Colomb and Joseph M. Williams.
2008. *The Craft of Research*. The University of Chicago Press.

辞典

- 『広辞苑』 電子版 岩波書店.
『大辞林』 電子版 三省堂.
『新英語学辞典』 1982. 研究社.

論文

- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説』 金子書房.
Givón, Talmy. 1979. *On Understanding Grammar*, Academic Press, New York.
半藤英明. 2003. 『係結びと係助詞』 大学教育出版.
本多 啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論』 東京大学出版会.
細江逸記. 1971. 『英文法汎論』 篠崎書林.
市川三喜. 1954. 『英文法研究』 研究社.
景山弘幸. 1999. 「話者と二重目的語構文」 葛西清蔵編著. 『英語学と現代の言語理論』
北海道大学図書刊行会
葛西清蔵. 1998. 『心的態度の英語学』 リーベル出版.
小林英夫. 1976. 「文体論的作家作品論」 『小林英夫著作集』 8 みすず書房.
中島文雄. 1951. 『英語発達史』 岩波全書.
中村芳久編. 2004. 『認知文法論Ⅱ』 大修館書店.
Ogawa, Akio. 1997. *On the Syntax and Semantics of the German Dative*.
松村一登・林徹編. *The Dative and Related Phenomena*. ひつじ書房.
大塚高信. 1938. 『英文法論考』 研究社.
関口存男. 1954. 『趣味のドイツ語』 三修社.
Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.